

[教育実践報告]

ピア・サポート活動の実践と今後の展望 — 熊本保健科学大学での取り組み —

岩村 純子^{1)*} 嶋田 かをる¹⁾ 松本 珠美²⁾
井崎 基博³⁾ 澤崎 美香⁴⁾ 河瀬 晴夫⁵⁾
友清 百千¹⁾ 原口 奈美¹⁾ 楢原 真二¹⁾²⁾

Peer Support Activities at Kumamoto Health Science University :
Current Practice and Future Prospects

Junko IWAMURA, Kaoru SHIMADA, Tamami MATSUMOTO
Motohiro ISAKI, Mika SAWASAKI, Haruo KAWASE
Momochi TOMOKIYO, Nami HARAGUCHI, Shinji NARAHARA

和文抄録

熊本保健科学大学では、学生が学生相談に参画し、自身の経験に基づいたアドバイスをを行い、適切な相談窓口情報を提供する役割をもつ、ピア・サポート（以下、PS）制度を2012年に開始した。主なPS活動は、入学希望者に対するオープンキャンパスでの相談活動、新入生に対する学生生活・修学への相談活動などであり、受験生や新入生の不安軽減、学生生活への適応へ重要な役割を果たしてきた。今回、PS活動の実践報告を行うとともに、その教育的意義を検討した。その結果、ピア・サポーター達は養成講座および実践活動での学生同士の相互交流によって、学生支援に関する理解を深めるとともに、基本的な姿勢・態度、コミュニケーションスキルを獲得していた。また、今後はさらに多様化する学生への支援として、誰もが支え、支えられる風土づくりの一翼を担うPS活動が期待される。なお、今後の課題としては、PS活動の教育的評価の策定が挙げられた。

キーワード：ピア・サポート， 学生支援， 教育活動

I. 緒言

日本ピア・サポート学会は、ピア・サポート（以下、PSとする）を次のように定義している。「学生たちの対人関係能力や自己表現能力等、社会に生きる力がきわめて不足している現状を改善するための学校教育活動の一環として、教職員の指導・援助のもとに、学生たち相互の人間関係を豊かにするため

の学習の場を各学校の実態に応じて設定し、そこで得た知識やスキル（技術）をもとに、仲間を思いやり、支える実践活動を、PSと呼ぶ」¹⁾。他方、日本学生支援機構（以下、JASSOとする）では、PSを「学生生活上で支援（援助）を必要としている学生に対し、仲間である学生同士で気軽に相談に応じ、手助けを行う制度」²⁾としている。JASSOによる学生支援に関する調査（2021）においては、PS等

所属

¹⁾ 熊本保健科学大学 学生相談・修学サポートセンター

²⁾ 熊本保健科学大学 保健科学部 医学検査学科

³⁾ 熊本保健科学大学 保健科学部 リハビリテーション学科 言語聴覚学専攻

⁴⁾ 熊本保健科学大学 保健科学部 看護学科

⁵⁾ 熊本保健科学大学 事務局

責任著者：岩村純子 morisima@kumamoto-hsu.ac.jp

の実施率は大学全体として49.6%であり、現在取り組みを実施している大学の9割が、今後の取り組みについて拡充や現状維持の意向を示していた。未だ、実施していない大学でも5割は今後の実施を検討しており、PS活動は全国的な拡がりを見せている。このような背景には、大学における学生の主体的活動や多様な価値観をもつ、学生同士の相互交流促進による教育的意義、そして障害学生の増加に伴う支援充実につなげる意図もあると思われる。

一方、JASSOでは、学生支援・学生相談を教育の一環として位置づけ、大学における様々な課題やニーズを抱える学生を支えるための諸活動として「学生支援の3階層モデル」による学生支援体制を示している³⁾。第1層の「日常的な学生支援」、第2層の「制度化された学生支援」、第3層の「専門的學生支援」からなり、それぞれの階層で様々な学生支援の機能を有すること、さらにそれぞれが研修や情報交換等を行い相互に連携することが求められる。PSによる学生支援はこの第2層にあたり、大学コミュニティ全体での学生支援体制の一つとして位置づけられる。多様化する学生の支援において、多角的な支援体制の整備は必須となってきた。

熊本保健科学大学（以下、本学とする）では、学

生の大学行事等への積極的参画によって大学全体に活気をもたらすことなどを期待し、2012年にPS制度を設けた。本学のPS活動は、大学の定める「PS学生相談実施要項」に基づき、アドバイスを必要としている本学の学生および受験生等に対し、適切な支援を迅速に提供することを趣旨とし、これまで新入生支援（履修登録、生活面）、定期試験対策等の相談会の他、入学希望者を対象としたオープンキャンパス開催時に活動を行ってきた。

今回、12年目を迎えた本学のPS活動を振り返り、活動の意義を明らかにするとともに、今後の活動への展望を示す。なお、本文における障害の表記は、障害は機能制限に原因があるのではなく、社会的障壁にあるとの考え（障害の社会モデル）に基づき、「障害」とする。

II. PS活動の概要

1. これまでの活動のあゆみ（表1）

本学は開学当時より学生の大学行事等への参画を進め、オープンキャンパスや地域連携事業等での実績をあげてきた。また、2011年には学生の自治組織である学友会およびその活動を支援する学生委員会

表1 ピア・サポート活動のあゆみ

年度	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023
担当部署 担当者	学生相談室 学生相談員・保健室スタッフ・事務員						学生相談・修学サポートセンター【支援学生育成部門】 学生相談・修学サポートセンター運営スタッフ					
主な活動	<p>◆新入生対応</p> <p style="text-align: center;">*新入生オリエンテーション（グループワークへの参画） → （※新型コロナウイルス感染症拡大のため中止）</p> <p style="text-align: right;">*新入生オリエンテーション （アイスブレイク・学内案内等への参画）</p> <p>◆履修登録相談（年2回）</p> <p>◆一人暮らし応援隊（4-5月）</p> <p>◆定期試験前相談会（年2回）</p> <p style="text-align: right;">◆在校生向け相談会 （実習・試験等）</p> <p>◆オープンキャンパスでの高校生対応（在校生との交流コーナー）</p> <p style="text-align: right;">◆イベント等での学内誘導等</p> <p>◆学生・スタッフとの交流会 → （※新型コロナウイルス感染症拡大のため中止）</p> <p style="text-align: right;">◆日本ピア・サポート学会学生参加 ◆他大学とのオンライン交流会</p>											
養成講座等	1日×年3回（交流会含む） [ファシリテーター養成]									半日×年3回 [オンライン講座]		
その他	<p>・プチ・サポーター制度試行・導入</p> <p>・ピア・サポーター昇級制導入</p>											

や学務課の教職員が中心となり、リーダーズ研修会を実施するなど、学生の大学行事への参画がより活発となっていた。同時期、学生による学修・生活支援としてのPS制度の導入を検討し、試行的に学生2名をオープンキャンパスでの生活相談コーナーに配置、また、大学コンソーシアム熊本主催の進路ガイダンスにおける先輩との座談会に出席させた。この学生らによる支援の手応えから2012年度、PS制度が正式に発足した。本学のピア・サポーターとは、「PS学生相談に参画し、自身の経験に基づいたアドバイスをを行い、適切な相談窓口の情報を提供する本学の学生」と定義する。ピア・サポーターの育成には、学生相談室（発足当時の部署名）学生相談員、保健室のスタッフ、事務職員を中心に、必要時初年次教育に携わる教員も関わり、スタートした。2018年度には、それまでの学生支援体制を改編し、学生相談・修学サポートセンターが立ち上がった。学生相談・修学サポートセンターは『学生相談部門』、『修学支援部門』、『支援学生育成部門』の3部門を有し、現在はこの『支援学生育成部門』にて運営スタッフがピア・サポーター養成を担っている。

1) 主な活動

本学では新入生が大学生活に早く馴染むように、開学当初より学友会を中心に新入生へ学内施設の案内・誘導等を行っていた。これらの活動を含め、2012年度PS活動としてピア・サポーターが一連の学生による支援活動として引き継いだ。そこで入学直後の諸手続きに係る事務室窓口での案内誘導や履修登録等の修学相談、一人暮らしの学生向けの生活相談等を開始した。また、前・後期定期試験前には、試験対策相談会として、試験に不安をもつ1年生への対応を行ってきた。相談対応は、情報提供のみならず不安に寄り添い、勉強方法の助言や実習に向けての助言など多岐にわたっている。2013年度からは、大学が進める『教員・職員・学生』協働の取り組みの一環として、新入生オリエンテーションにピア・サポーターが参画し、グループワークでの新入生の主体的学修を促進するファシリテーターの役割を担った⁴⁾。新入生オリエンテーションでのグループワークへの参画は継続していたが、2020年度のCOVID-19感染症拡大時には新入生オリエンテーション全体が中止となり、グループワーク参画をはじめ様々なPS活動も中止せざるを得ない状況で

あった。

2021年度より大学の感染危機対策本部へ上申のもと、感染対策を実施しながら、活動を再開した。また、新入生オリエンテーションの在り方も変更され、ピア・サポーターは案内誘導の他、アイスブレイク、教科書販売と合わせたキャンパス案内等で参画した。併せて、これまで実施してきた履修登録相談や一人暮らし応援隊など大学生活の相談も再開した。

また、当初から継続して実施している活動は、オープンキャンパス開催時の高校生やその保護者等への対応である。この対応は以前、学科主体で実施していたが、より学生目線での大学の魅力を伝えるために、PS活動としてブースを構え受験を検討している高校生に、ピア・サポーターが自身の経験を基にした具体的なアドバイスをを行い、時には保護者の不安等に対する相談にも応じている。

2) プチ・サポーターおよびピア・サポーター昇級制度導入

本学のPS活動は有償で行われる。発足した当初、PS活動の趣旨に賛同し、主体的に関わる人材をどう確保し、教育していくかが課題であった。発足2年目の2013年度は、発足時のPSメンバーに対して経験を活かし、かつスキルアップを目的に、ファシリテーターとしての養成を行った。養成講座を修了したメンバーには、PS活動時やピア・サポーター養成講座時にファシリテーターとして、後輩育成の立場での協力を依頼した。その後、2014年度より、1年生を対象とした『プチ・サポーター』の登録を試行的に開始し、2015年度より本格導入した。この『プチ・サポーター』制度は、1年次より、PS活動の理解促進やPS活動に必要な基礎知識の修得を目指し導入したものであり、名称は本学における造語で、ピア・サポーターの卵を意味したものである。また、同時期には、ピア・サポーターの昇級制度を導入し、初級、中級、上級と3つの段階を設定した。これは、ピア・サポーターの経験値によって、学生対応スキルも異なり、それに見合った報酬を出すことでピア・サポーターの活動意欲につなげることをねらいとした。昇級の条件は表2に示す。

さらに、2016年度からは、プチ・サポーターおよびピア・サポーターの基本姿勢・行動目標（役割意識、基本的態度、サポート活動について）を定めた。（表3）

表2 各分類の資格・昇級条件

分類	資格・条件
プチ・サポーター	本学の学部1年生で、ピア・サポート学生相談に対する理解と共感を示す学生とする*
初級ピア・サポーター	実施要項に定められたピア・サポーターの資格を有し、必要な研修を受講している**
中級ピア・サポーター	総活動時間が20時間を超え、かつ1年以上継続してピア・サポート活動を行っている**
上級ピア・サポーター	総活動時間が40時間を超え、かつ2年以上継続してピア・サポート活動を行っている**

*熊本保健科学大学プチ・サポーター制度に関する要項より

**熊本保健科学大学ピア・サポート学生相談実施細目より

表3 ピア・サポーター／プチ・サポーターの基本姿勢・行動目標

分類	基本姿勢	行動目標		
		<役割意識>	<基本的態度>	<サポーター活動>
プチ・サポーター	学内におけるピア・サポート活動を知り、サポーターの一員として活動に参加できる	ピア・サポート活動について研修を通して理解し、サポーターとしての意義・役割を知ることができる	ピア・サポーターに必要な基本的態度知り、習得できるよう努力することができる	サポートされる側の視点から、サポーターの一員として活動に参加することができる
初級ピア・サポーター	ピア・サポーターの役割を理解し、中級・上級者と協同しサポート活動が担える	ピア・サポーターの役割を理解できる	ピア・サポーターとしての基本的態度を身につけ、スキルアップのための研鑽に努めることができる	自らの役割に責任をもち、他者と協同してサポート活動ができる
中級ピア・サポーター	自律し、サポーターのロールモデルが担える	様々な場を見極め、場に応じて適切な対応ができる	ピア・サポーターとしての適切な態度を身につけ、スキルアップのための研鑽さらに自己評価できる	ピア・サポート活動に積極的に参加し、プチ・サポーターや初級ピア・サポーター育成の視点で協同できる
上級ピア・サポーター	ピア・サポート活動におけるファシリテーターを担える	主体的にかつ適切なサポートを提案・行動できる	自らの態度を評価し、さらに客観的視点で他者にも助言できる	リーダーシップを発揮し、ピア・サポーターの活動を促進する働きかけができる

3) 養成講座の開催 (表4)

養成講座は、PSの基本知識・基本的態度の修得、スキルアップ、さらにはピア・サポーター同士の交流を目的に、年3回の定期開催とし、PS学生相談実施要項にも必要な研修(養成講座)を受けることを定めている。各回に主なテーマを設けており、第1回(7月頃)は、定期試験対策の相談会やオープンキャンパス時の対応に焦点をあて、傾聴を基本としたコミュニケーション訓練とロールプレイを中心に実施している。また、オープンキャンパスへの対応準備として、コミュニケーション訓練や接遇マナーの基本研修、学科専攻の魅力をもとめた情報誌の作成などを行っている。さらに、自身の所属学科

に限らず全学的に相談対応できるよう、各学科における授業・学外実習等の情報共有を行っている。第2回(12月頃)は、2016年度より年々多様化している学生や修学支援を必要とする学生の増加を背景として、『障害と学生支援』を主テーマに障害の理解に関する講座を実施している。内容は、障害の概念やその配慮に関する講義の他、体験学習等を通して様々な障害への支援について考える機会を設けている。第3回(3月末頃)は、新入生を迎える準備として、ピア・サポーターの基本的な姿勢の確認、新入生対応事例のロールプレイ等を実施している。

2015年度から始まったプチ・サポーター養成も4、5月にプチ・サポーターの募集を行い、5月頃にピ

表4 ピア・サポート養成講座実施内容

2011年度	3月28日(木)	全7時間	新規PS	ピア・サポートとは、学生生活に欠かせない用語や制度などの基礎知識、ピア・サポート時の基本姿勢、ロールプレイ
2012年度	9月20日(木)			詳細な記録なし
	3月27日(水)	全9時間	継続+新規PS	ピア・サポートとは、学生生活に欠かせない用語や制度などの基礎知識、ピア・サポート時の基本姿勢、ロールプレイ、体験談報告、新入生オリエンテーションサポートについて
2013年度	8月7日(水)	全4時間	継続のみ	ロールプレイ *ファシリテーター養成①
	12月7日(土)	全4時間	継続+新規PS	ピア・サポート時の基本姿勢、ロールプレイ、ピア・サポートとは *ファシリテーター養成②
	3月28日(土)	全4時間	継続のみ	傾聴スキルほか、ロールプレイ、自分たちの役割について、今後の活動について考える *ファシリテーター養成③
2014年度	7月19日(土)	全5時間	継続のみ	オープンキャンパス(以下OC)向け学科・専攻紹介資料作成、その他就職、入試、時間割等資料作り
	12月6日(土)	全4時間	継続+新規PS	(新規PS)規程の確認、基本姿勢、基本知識(継続)質問への回答集づくり(合同)ロールプレイ *ファシリテーター養成④
2015年度	4月4日(土)	全6時間	継続+新規PS	(ピア)紙上事例 (ブチ)サポーターに必要な知識・態度(合同)新入生オリエンテーション演習
	4月27日-28日	各1時間×3回	ブチのみ	第1回ブチ・サボワークショップ開催・ブチサポの位置づけ・新入生の立場から疑問に感じたこと、不安に感じたこと
	7月11日(土)	全7時間	ピア/ブチ2部制	(ブチ)学科の特徴を理解する ロールプレイ:OC対応 (合同)マナー講座・OC準備・資料作成等
2016年度	4月3日(日)	全7時間	ピア/ブチ	(ピア)ファシリテーター体験 (ブチ)傾聴スキル、自己理解、多様な価値観にふれる (合同)新入生オリエンテーション準備
2016年度	7月3日(日)	全6時間	ピア/ブチ2部制	(ブチ)ピア・サポーターの基本知識、基本姿勢・傾聴体験 (合同)OCに向けてグループワーク(以下GW)、ロールプレイほか
	11月20日(日)	全7時間	ピア/ブチ2部制	(ブチ)対人援助のためのコミュニケーション1年生が抱える不安・悩みの抽出 (合同)多様な学生を理解しよう、支援体験事例検討、相談会対応ロールプレイ
2017年度	4月3日(月)	全7時間	ピア/ブチ	(合同)1年間のサポート活動の振り返り 新入生オリエンテーション準備、傾聴スキル
	7月9日(日)	全6時間半	ピア/ブチ2部制	(ブチ)ピア・サポーターとしての基本知識、姿勢、自己理解、傾聴の基本姿勢など (合同)ロールプレイ(OC対応)、OC準備マナー講座
	12月9日(土)	全7時間	ピア/ブチ2部制	(ブチ)対人援助のためのワーク (合同)多様な学生を理解しよう、GW事例検討
2018年度	4月3日(火)	全7時間	ピア/ブチ	(合同)新入生オリエンテーションに向けて一年間のサポート活動の振り返りほか
	7月8日(日)	全6時間半	ピア/ブチ2部制	(ブチ)自己理解、傾聴の基本姿勢 (合同)ロールプレイ(OC対応)・OC準備
	12月15日(土)	全6時間	ピア/ブチ2部制	(ブチ)学生生活に欠かせない用語や制度の基礎知識・多様な学生を理解しよう (合同)心のバリアについて学ぼうGW
2019年度	4月1日(月)	全6時間	ピア/ブチ	(合同)新入生オリエンテーションに向けてのGW他
	7月7日(日)	全7時間	ピア/ブチ2部制	(ブチ)学内における修学支援に必要な用語の確認、マナー講座、傾聴の基本姿勢 (合同)学科の特徴や紹介のまとめ、ロールプレイ(OC対応)
	12月21日(土)	全7時間	ピア/ブチ2部制	(ブチ)多様な学生とは、難聴疑似体験 (合同)発達障害のあるクラスメイト、心のバリアフリーについて学ぼう
	3月30日(月)			*COVID-19感染症で中止
2020年度	7月13日-19日	2時間程度	ピア/ブチ	<オンライン講座> 本学におけるピア・サポート制度、修学支援に必要な用語・制度、傾聴の基本姿勢
	12月23日-1月5日		ピア/ブチ	<オンライン講座> 多様な学生とは、発達障害への理解受講確認テスト実施
	3月30日(火)	全4時間	ピア/ブチ	(合同)サポーターとしての心構え、傾聴の基本姿勢、活動における感染対策、遠隔授業へのアンケート結果を踏まえて新入生対応についてGW、ロールプレイ
2021年度	7月3日(土)	全3時間	ピア/ブチ	(ブチ)修学支援に必要な用語・制度などの基礎知識、基本的な傾聴スキル (ピア)OC・定期試験対策の準備(資料の見直し等)、遠隔授業の振り返り(合同)ロールプレイ
	12月18日(土)	全3時間+a	ピア/ブチ	<オンデマンド配信>(2週間) 本学の修学支援体制について、CUDについて知って考えよう、2020年度配信:多様な学生とは、発達障害への理解<対面>修学支援学生でPSでもあった卒業生の講演会、PSとしてできることを考えよう
	3月30日(水)	全3時間	ピア/ブチ	(ブチ)新入生を迎えるにあたってのGW・ロールプレイ (ピア)新入生オリエンテーションの打ち合わせ、資料作成 (合同)1年間の活動の振り返り
2022年度	7月2日(土)	全3時間	ピア/ブチ	(ブチ)修学支援に必要な用語・制度などの基礎知識、基本的な傾聴スキル (ピア)相談スキル向上のためのポイント確認、ファシリテーターとしての役割について (合同)ロールプレイ
	12月10日(土)	全3時間+a	ピア/ブチ	<オンデマンド配信>(2週間) 静岡県心のバリアフリーについて、障がいへの理解や本学の取組み <対面>学内バリアフリー点検・報告会
	3月31日(金)	全3時間	ピア/ブチ	(合同)ピア・サポーターの基本姿勢、コミュニケーションスキル・課題解決のスキル

ア・サポーターとは別日程で研修を実施したのち、7月のPS養成講座に合流したり、または同日2部制としたプログラムを設定し、ピア・サポーターとの交流会を兼ねたりして実施してきた。ここ近年は、同日程で別プログラムと合同プログラムを合わせ実施している。

2018年度より、運営スタッフ数名が日本ピア・サポート学会へ入会したことを機に、PS活動に必要な教育研修を受け、うち1名は学会認定のPS・トレーナーの資格を取得するなど、本学でのピア・サポーター養成の担い手となっている。

Ⅲ. 具体的実践の結果

1. ピア・サポーターの動向

1) ピア・サポーターおよびブチ・サポーター登録者数

2012年度、10名で始まったPS活動だが、その後のブチ・サポーター導入等でピア・サポーターの志願者は増加している(図1)。2020年度のみ新入生オリエンテーションが中止となった影響からブチ・サポーターの志願者が少なく、追加募集をかけることとなった。2023年度は7月1日時点で、ブチ・サポーター58名、ピア・サポーター136名、合

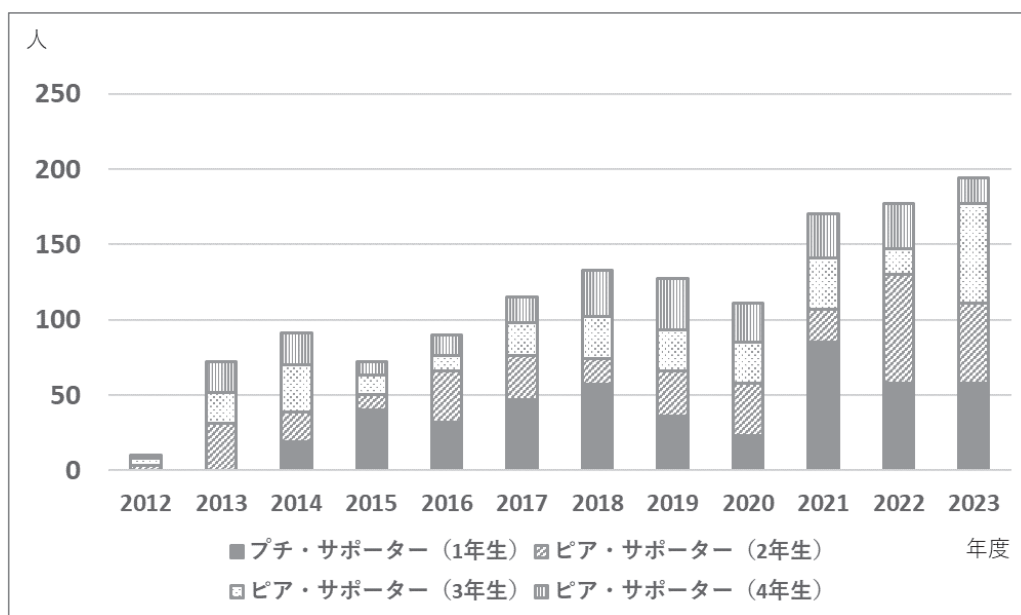


図1 サポーターの登録状況

表5 ピア・サポーターの経年推移

学科/専攻	2019年度入学生						2020年度入学生						2021年度入学生						2022年度入学生					
	M	N	P	O	S	合計	M	N	P	O	S	合計	M	N	P	O	S	合計	M	N	P	O	S	合計
1年次	4	17	3	7	5	36	7	5	3	1	7	23	24	24	11	8	18	85	26	16	7	6	3	58
2年次	4	16	3	7	5	35	6	5	3	1	7	22	19	18	9	8	18	72	25	13	7	5	3	53
3年次	3	16	3	7	5	34	6	3	2	1	5	17	19	15	6	8	18	66						
4年次	2	15	3	6	4	30	6	3	2	1	5	17												
登録率	83.3% / 4年間						73.9% / 4年間						77.6% / 3年間						91.4% / 2年間					

M：医学検査学科（100），N：看護学科（100），

リハビリテーション学科 P：理学療法学専攻（40），O：生活機能療法学専攻（40），S：言語聴覚学専攻（40）

※（ ）は定員

計194名が登録中である。これは全学部生の13.2%にあたる。しかし、学科学年によって長期学外実習等で活動が一時中断することになり、実際の活動時の参加者数は登録者数よりもやや減少する。

次に2019年度以降の入学年度別ピア・サポーターの経年推移（表5）をみると、プチ・サポーターに登録した学生のほとんどが2年次進級時にピア・サポーターとしての活動を希望していた。さらに1年次から4年次の登録率について、2019年度以前は50%程度であったが、2019年度以降は70%以上に増加している。

2) PS活動への参加動機

PS活動への参加動機については、2022～2023年

度にプチ・サポーターの申込書に自由回答で記入する欄を設けて調査した。その結果、118人からの回答があり、自由回答の内容についてKHCoder3を用いた計量テキスト分析を行った。結果を共起ネットワークで示す（図2）。多くは「新入生オリエンテーションでピア・サポーターが活動する姿を見た」ことや、「実際相談会に参加した時のピア・サポーターの対応」が登録動機につながっていた。そのほか、「高校時代に参加したオープンキャンパス時のピア・サポーター対応がきっかけ」とする学生もいた。そして多くのプチ・サポーター登録者が「誰かのために役に立ちたい」という思いをもって参加していた。

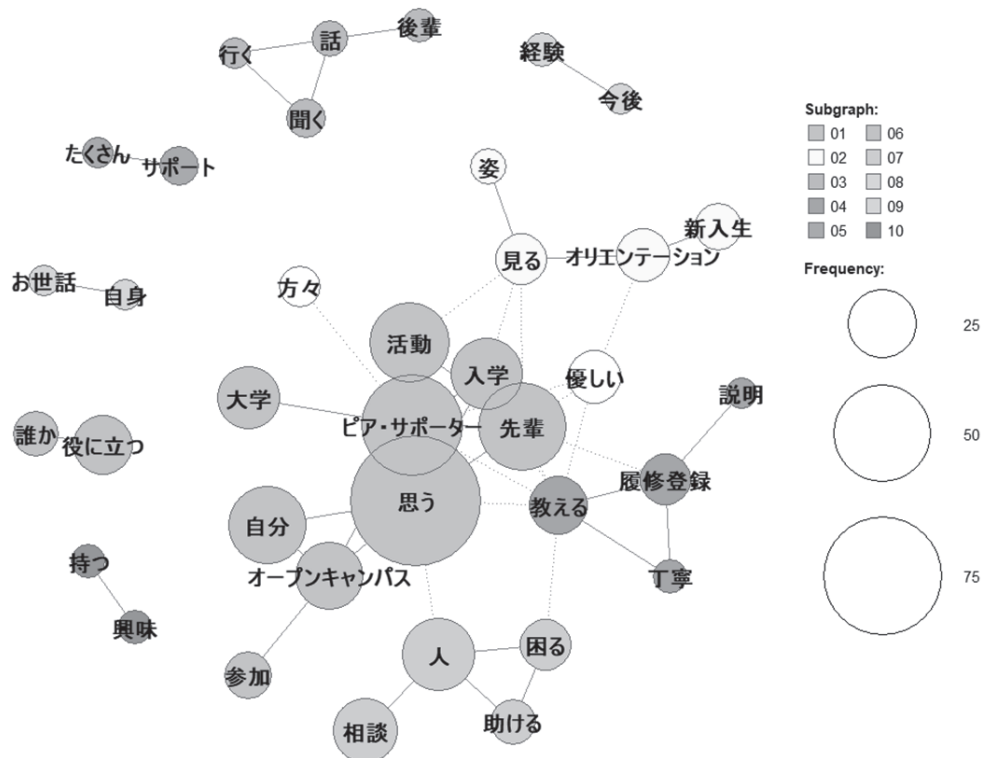


図2 ピア・サポーター登録動機の共起ネットワーク

2. PS 活動の実践

2022年度の活動実績例を示す(表6)。まだCOVID-19感染症拡大による影響から中止となった活動もあるが、年間を通じて概ね計画通りに実施することができた。2022年度9月の履修登録相談会に来場した相談者のアンケート結果(回答率33.3%)では、満足度を1～5で問うと満足度が一番高い「5」が17名(81%)、「4」が4名(19%)であった。自由記述した感想すべてにおいて「参加してよかった」と、好意的な反応が示された(表7)。

特に2022年度は、ピア・サポーター達からの、「1年生への支援だけでなく、他学年向けの実習や定期試験等に関する相談会も開催して欲しい」との要望を受け計画した。1年生以外の学年に対応する実習や定期試験等の相談会は専門性が高くなることから、同学科・専攻のピア・サポーターが対応せざるを得ない。しかし、授業暦の後期に入ると4年生のピア・サポーターは、活動を終える。また、3年生は学外実習が開始されるなど、ピア・サポーター達自身のスケジュール面により対応が困難な学科もあり、開催時期の再検討が必要となった。そのような中ではあったが、看護学科では長期学外実習に向

けた相談会を開催することができた。来場学生の実数こそ少なかったが、参加した学生のアンケートからは、「不安ばかりだったので先輩の話を聞くことができ少し自信がついた」「今後の実習をイメージすることができた」、「自分の不安を口にして助言をもらうことで頑張ろうと思った」、「実習に前向きな気持ちを持つことができた」などの回答が示された。

その他、コロナ禍においてオンライン交流が普及したことにより、2021年日本ピア・サポート学会第19回大会での学生交流会への参加や、2022年には熊本県内5大学の学生支援に携わる学生たちと、オンラインでそれぞれの活動を紹介し合う交流会をもつなど、新たな活動の展開をみせ始めている。

3. ピア・サポーター養成講座

1) PS 活動に必要な知識・スキル

2022年度3月の養成講座概要について述べる。この講座でのテーマは、『ピア・サポーターの基本姿勢を再確認し、今後の活動および新入学生を迎える準備をしよう』と設定し、対面にてピア・サポーター、プチ・サポーター合同で開催した。参加者は1～3年次の95人(参加率70%)であった。4月か

表6 2022年度ピア・サポート活動実績

月	主な活動内容	PSのべ人数	来場者数
4	・新入生オリエンテーション参画（アイスブレイク、学内施設案内等）	70	－
	・相談会開催（一人暮らし応援・履修登録相談）全5日間	68	128
5	・プチ・サポーター説明会開催	80	－
	・相談会開催（学生生活・修学相談）全3日間	17	32
7	・第1回ピア・サポーター養成講座開催	122	－
	・相談会開催（定期試験対策）※感染状況により一部中止	8	6
	・オープンキャンパス参加「先輩との交流コーナー」	16	73
8	・イベント参加「からだのふしぎ探検 in 熊本保健科学大学」（案内誘導）	13	－
	・オープンキャンパス参加「先輩との交流コーナー」	17	21
9	・オープンキャンパス参加「先輩との交流コーナー」	10	16
	・相談会開催（履修登録相談）全3日	31	63
10	・他大学とのピア・サポーター交流会（オンライン）	2	－
	・ピア・サポーター4年生感謝の会	25	－
12	・第2回ピア・サポーター養成講座開催（事前配信プログラム＋対面）	92	－
1	・相談会開催（定期試験対策）全5日間※1年生ほか2年生向けも開催	42	32
2	・相談会開催（看護実習前相談）1日	3	5
3	・キャンパス見学会参加「先輩と話してみよう」	23	34
	・第3回ピア・サポーター養成講座開催	95	－

表7 来場者の感想

来場者の感想	<2022年度9月相談会より> 21名回答/63名
履修・選択科目について悩んでいたの、アドバイスを聞いてよかった*	
授業や試験、実習のことも聞けたのでよかった*	
疑問や気になっていたことを知ることができた*	
先輩方の意見やアドバイスを直接聞くことができ、とても良かった*	
有益な情報をたくさんいただいた*	
知っていると知らないのでは、これからのモチベーションが全く違って見えた	
準備していたもの以外にも聞くことができ今後のためになった	
普段はなかなか聞くことができないのでよかった	
先輩が経験したことを聞くことができよかった	
参加してよかった	
話がしやすく、また相談したいと思った	
先輩方がとても優しくかった*	
サポーターが気さくで聞きやすかった	

※類似回答複数あり

らプチ・サポーターが本格的にピア・サポーターとして活動を始めることから、ピア・サポーターの基本姿勢を再確認することを目的に、日本ピア・サポート学会のPS標準プログラムを基に構成した。具体的な内容としては①（改めて）PSとは、②コミュニケーションスキル、③課題解決のスキルとした。

参加者の感想としては、「PSの目的や、ピア・サポーターとしての役割を一から学び直すことができ、とても勉強になった」や「ピア・サポーターはヘルプやレスキューのように相手の困っていることを肩代わりするのではなく、サポートやフォローをすることが重要であると改めて再確認できた」、 「今までは授業などで傾聴のスキルを学ぶ機会があったが、

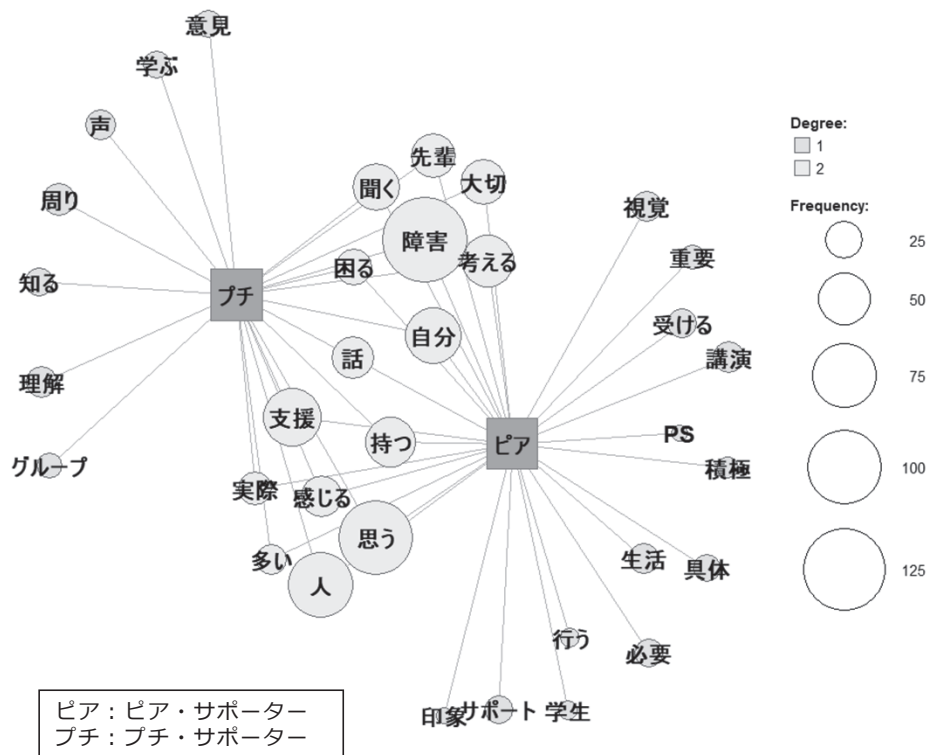


図3 養成講座の感想の共起ネットワーク

実際の問題解決スキルを学ぶ機会はあまり無かったので、とても良い経験になった」, 「一人ひとり成長する力, 問題を解決する力があるということを理解し, 相談に乗ることが改めて大切だと思った」などが挙がっていた。

2) 障害と学生支援

2021年度の12月の養成講座概要について述べる。この講座は『障害があって生きづらさを抱える人への理解と, 学生同士が支え合う風土づくりを目指して』と題し, 事前配信動画の視聴と対面ワークの2部構成で実施した。事前配信の動画内容は, 本学の修学支援体制の概略説明のほか本学で取り組みを始めたカラーユニバーサルデザイン⁵⁾(人間の色覚の多様性に対応し, より多くの人に利用しやすい配色を行った製品や施設・建築物のほか, サービスや情報を提供するという考え方のこと: 以下, CUDとする)に関する内容である。さらにプチ・サポーターには, 前年度のプログラムを参考に, 多様な学生の理解に関する動画視聴を課した。CUDの取り組みはそれまで教職員への啓発活動が主体であったが, この機会を利用しピア・サポーターにも啓発を

行った。なお, 対面ワークプログラムは, 視覚障害がありながら在学時にピア・サポーターとして活躍した経験をもつ本学の卒業生の講演会を開催し, それをもとに視覚障害や聴覚障害の方への支援について考える機会を設けた。

参加したサポーターは, 事前配信動画視聴プログラムで120人(参加率87.0%), 対面ワークプログラムで100人[ピア・サポーター31人・プチ・サポーター69人](参加率72.5%)であった。対面ワークプログラム終了時, 受講感想の記述を基に, KHCoder3を用いた計量テキスト分析を実施した。また, 対面ワークプログラムを受講したサポーターの感想を外部変数としてピアとプチに分類し, 共起ネットワークで示した(図3)。

その結果, 全対象者に共通して, [障害][思う][人][支援][考える][自分]などが多く抽出された。卒業生から障害と向き合う姿勢や様々な思いを語ってもらったことで, 「支援の大切さ」, 「みんなが生きやすい社会になるように」, 「自分にできることは」など自らの考えを述べていた。サポーター別にみると, ピア・サポーターでは, [生活][具体][積極][必要]などが抽出され, 「障害をもった方の困

りごとや必要な支援、生活の様子についての話を聞くことで、私たちができるサポートや関わり方について具体的に考えることができた」や「理解だけでなく、具体的な支援を提示していくことが専門職を持つ自分たちに求められているのだと思った」などの意見があった。プチ・サポーターは、「意見Ⅱ学ぶⅡ理解Ⅱ周り」などが抽出された。具体的には、「グループワークで障害のある人の困りごとや私たちができることについて考え、良い機会になった」、「グループワークで障害をもつ学生の困難さや自分たちにできることを考えることや他のグループの意見を聞くことができ、良いきっかけになった」など、他者と意見交換することの意味を感じる意見があった。

Ⅳ. 考 察

1. 本学における PS 活動の意義

近年、大学入学後の不適応、休学・退学などの増加を背景に、学生支援の充実が求められている。本学では12年にわたる活動の実績として、ピア・サポーターによる入学直後からの相談活動によって、大学生活への適応を促進し、さらにはその後の実習・演習や定期試験など、ストレス度合いの高い課題に対応するなど、学生支援としての役割を果たしていると評価する。ピア・サポーターの多くが、自身のサポートを受けた体験をもとに、他者をサポートしたいと動機づけになっていたことから、PS活動にある支え合いの風土が根付きつつあることを示唆している。

また、オープンキャンパスや他大学との交流などに臨むことで、ピア・サポーターは自分の大学を知る事から始まり、大学の顔として、責任ある行動にもつながっている。これらは結果として、大学の広報活動や入学者の安心感、学生の満足感などに還元され、大学の活性化にもつながると推察される。

日本ピア・サポート学会は、ピアの考え方について『誰もが成長する力をもっている。誰もが自分で解決する力を持っている。人は実際に人を支援する中で成長する。そして誰もが他者をサポートできる存在であり、サポートを受ける存在である。』と提唱し、PS活動を「教育活動」と位置付けている¹⁾。そこで、次に本学のPS活動について養成講座と諸活動の両面から教育的意義を考察する。

同学会は、PSの構造について実施枠組みの決定からプログラムの評価の間に、『トレーニング』、『プランニング』、『サポート活動』、『グループスーパービジョン』の循環を通してさらなるスキル獲得やサポート活動を目指すことを示している¹⁾。つまり養成と実践は連動していなければならない、全体を評価する必要がある。本学の養成講座はこれまで、学生相談の要である傾聴を軸としたコミュニケーションスキルについて、講義・演習を通してトレーニングを行ってきた。特に、実践力を養うためのロールプレイでは、ピア・サポーター、相談者、観察者それぞれの立場で意見交換をするなど、対応スキル獲得のほか、自身を振り返る機会となっていた。障害をテーマにした養成講座においても、受講したサポーター達の感想から特にプチ・サポーターは、ピア・サポーターとのグループ活動を共にすることにより、その相互交流による学びの深化を体得するなど、単に知識を獲得するだけでない共に学ぶ意義を感じていた。つまり、協同学習と共にこれら様々なトレーニングの中で生まれるPS体験が、実践でのPS活動に展開されていると考えられる。相談会に参加した学生の意見からも、ピア・サポーターが基本的スキルをベースに相談者の悩みに寄り添った適切な助言・対応ができていることを評価できた。ピア・サポーターの多くが1年次の教養選択科目『カウンセリング技法』や『心理学』等を受講していることも、基本的知識・スキルの取得につながっていると考える。また、スタッフからみるピア・サポーターは、相談者の反応から自らの相談対応を振り返ったり、自信をつけたり、経験の積み重ねによって成長していると評価する。これらの経験は、普段の講義や実習等での学習姿勢にもつながり、さらには対人援助職としての基本的姿勢を身につける貴重な機会となっているものと期待する。

2. 今後の活動への展望

本学において、PS活動に参加した学生には相談内容と相談対応の振り返りおよび感想等を記入する活動報告書の提出を課している。これにより学生のPS活動での対応スキルを自己認知する機会となっているが、現在、担当教員からの活動への振り返りへのフィードバックがタイムリーに出来ておらず、不十分な現状がある。中井は、諸活動や研修の在り方において大学スタッフの存在が重要な要素とし、

「大学スタッフは組織を滞りなく運営することに傾注せず、協働の中でピア・サポーター自身がそのスキルを自己認知できるように導き、そして実際の活動の場や研修でそれらを可視化するプロセスを検討すべき」⁶⁾と述べている。また、上述した日本ピア・サポート学会の提唱するPSの構造を参考にすると、本学の状況は実施とその評価のつながりが途切れるなど、一連の循環的なプロセスとしての見直しが必要である。加えて現在、日程等の都合からプチ・サポーターとピア・サポーターの合同研修機会が多くなっていることに関して、合同で実施するメリットを残しつつ、スキルに応じた段階的な教育プログラム実施への検討が必要と考える。次にPS活動や養成講座による学生の成長をどう評価するかが課題である。PSに関する評価において、永井⁷⁾は、PS活動によるピア・サポーターの成長の視点において、教育効果の検討を行い、ソーシャルスキルの向上、協調性の向上などが期待されている。堀田ら⁸⁾も、学会標準プログラムに対応した養成授業を実施し、ソーシャルスキル・ライフスキルの獲得を示している。本学では大まかな目標設定はあるが、具体的な評価を行う指標がまだなく、教育活動における評価の設定を検討する必要がある。

さらに、PS活動における学生の主体性がしばしば課題となりうる。本学のピア・サポーターの多くは、自身が受験および入学後にピア・サポーターに支えられた経験をもって志望してきている。医療系大学でのカリキュラムの過密さの中でも、PS活動に志願し、「他者と関わること」、「他者を支えること」に向き合う姿勢は主体性そのものであると考える。ここ数年の登録者数の増加は、コロナ禍で様々な活動が制限された分、学生が他者との関わりをより強く求めたことも影響していると推察する。また、近年のピア・サポーターの定着は、活動への参加状況に差があるものの、養成講座の参加率は常に高く、学生の学びや成長意欲、PS活動継続の意思を感じることができる。これらのことから本学のピア・サポーターとしての評価だけではなく、医療系大学生としての成長の視点も含めた、独自の評価設定を検討したい。

最後に、本学においてPS活動が学生支援の一つとして確立しつつあり、ピア・サポーターは、学生にとってより身近なサポーターであるが、一方でサポーター・場所・機会を利用しない、利用できない

学生など、様々な理由で支援を受けられずにいる学生が存在していることも忘れてはならない。多様化する学生の現状を踏まえ、誰もが支え、支えられる風土づくりを目指し、本学内の教職員や学生の活動等を伝える入試・広報課作成による情報“週刊NEWS LETTER”を活用した広報活動や、ピアな立場からの様々な情報発信（SNS等）の検討など、PS活動の在り方自体も検討していく必要がある。加えて近年、大学コンソーシアム熊本等のつながりから、県内外の大学との交流なども始まっており、これまでの学内活動内容に留まらず、学生自身で活動の幅を広げる挑戦にも期待したい。

謝 辞

これまでPS活動に携わり、支えて頂きました本学非常講師の松下弘子先生他、学生相談室相談員をご担当頂きました佐川佳南枝先生、岩瀬裕子先生、吉村友希先生、白鳥多知子先生、那須知広先生、さらに元学務課課員坂元美里様、および学生相談・修学サポートセンター連携員の先生方に感謝いたします。

付 記

本論文の一部は、日本ピア・サポート学会第20回記念研究大会において発表した。また、本研究における利益相反は存在しない。

文 献

- 1) 日本ピア・サポート学会. ピア・サポートの理念. <http://www.peer-s.jp/idea.html> (2023年6月2日検索)
- 2) 日本学生支援機構. 大学等における学生支援の取り組み状況に関する調査. 2021年度, <https://www.jasso.go.jp/statistics/gakuseitorikumi/2021.html> (2023年6月2日検索)
- 3) 日本学生支援機構. 大学における学生相談体制の充実方策について—総合的な学生支援」と「専門的な学生相談」の「連携・協働」—. 2007, https://www.jasso.go.jp/gakusei/publication/_icsFiles/afiedfile/2021/02/12/jyujitsuhausaku_2.pdf (2023年8月2日検索)

- 4) 河瀬晴夫, 上林亜夜, 坂元美里, 他. 熊本保健科学大学における「教・職・学」協働の取組み～新入生オリエンテーションにおけるピア・サポーターの参画事例～. 保健科学研究誌, 11号: 91-107, 2014.
- 5) CUD とは. NPO 法人カラーユニバーサルデザイン機構.
https://cudo.jp/?page_id=74 (2023年12月1日検索)
- 6) 中井次郎, 松田優一. 大学ピア・サポート活動における研修の在り方についての一考察. ピア・サポート研究, 19号: 39-51, 2022.
- 7) 永井暁行. ピア・サポート活動への参加による批判的思考・他者との関わり方の成長—マルチレベルモデルを用いた縦断データからの検討—. ピア・サポート研究, 17号: 1-15, 2020.
- 8) 堀田亮, 高口僚太郎, 山田日吉, 他. 大学におけるピア・サポーター養成授業による受講生の成長. ピア・サポート研究, 17号: 69-80, 2020.

(令和5年12月18日受理)

Peer Support Activities at Kumamoto Health Science University : Current Practice and Future Prospects

Junko IWAMURA, Kaoru SHIMADA, Tamami MATSUMOTO
Motohiro ISAKI, Mika SAWASAKI, Haruo KAWASE
Momochi TOMOKIYO, Nami HARAGUCHI, Shinji NARAHARA

Abstract

In 2012, Kumamoto Health Science University launched a peer support (PS) program whereby current students offer peer counseling and advice; they also provide referrals to other university resources, as appropriate. Primary PS activities include talking with prospective students at “open campus” events and advising new students on student life and academics. These efforts play an important role in reducing anxiety and promoting adaptation to university life. This study report on the practice of PS activities and examine their educational significance. Results indicate that peer supporters deepened their understanding of student support in general, and also acquired relevant attitudes and communication skills through training courses and real-world interactions. PS activities may contribute to the creation of a diversity-affirming climate wherein everyone feels able to both support and be supported by others. Development of an educational evaluation of PS activities is one important area for future study.